

事例①

学外との連携により、新学部で留学を必修化

語学教育と留学先確保の力を借り「グローバル」の新たな冠をめざす

近畿大学

理系学部の研究などで社会の注目が高まっている近畿大学が、

2016年度、グローバル人材育成を目的とした新学部を開設する。

学部生全員の留学を必修とし、語学教育において世界的に実績のあるベルリッツ、ELSと連携。

弱点と自覚してきた国際性を一気呵成に高めようという戦略だ。

正課に学外の力を借りる柔軟な発想で、スピードをもってビジョンを実現する手法を紹介する。

学内での語学教育から留学中心のプログラムへ

2014年度から2年連続して志願者数全国1位、2015年にはTHE世界大学ランキング601~800位にランクインするなど、近畿大学は関西にとどまらず、全国的な評価を上げている大学だと言えるだろう。広く知られている養殖マグロの研究や医学部を擁することもあり、理系分野の研究力が強みだ。

一方、文系は研究論文の数も相対的に少なく、特に「国際性」の弱さが泣きどころだったという。建物内での会話を英語に限る英語村、7か国語の講座を無料で受講できる語学センターなどのこれまでの施策は、「学内で“語学を学ぶ”レベルだった。真にグローバル化をめざすならば、留学を中心とする教育プログラムをつくらなければならない」と新学部の開設準備委員長を務める増田大三副学長は述べる。

2013年、大学は全学のグローバル化に向けて一気に舵を切る方針を固めた。改革を先導し、他学部へ刺激を与える「起爆剤」に位置付けられたのが、2016年度に始動する国際学部だ。専用の学部棟も建設が進んでいる。

同学部は2つの専攻を設置する。グローバル専攻(450人)は、高度な英語運用能力を身に付け、多文化社会で活躍できる人材の育成をめざす。さまざまな地域の特性や課題を理解する「グローバル・スタディーズ」、言語の機能とコミュニケーションを学ぶ「コミュニケーション・スタディーズ」、アジア

各国の歴史や文化、日本との関係を学ぶ「アジア・スタディーズ」の3つの専門領域を持つ。一方の東アジア専攻(50人)は「中国語コース」「韓国語コース」に分かれ、それぞれの言語と英語を身に付け、近隣諸国との交流に貢献する人材の育成をめざす。

「外国語学部のように言葉を学ぶことが目的ではなく、国際○○学部のように社会科学を深める学部でもない。言葉をビジネスに役立てるための方法や知識を学ぶという点で、他大学との差別化を図る」(増田副学長)。

新学部では、ベルリッツとELSの全面的な協力のもと、英語力の向上を図り、留学先および帰国後の英語での



国際学部棟の完成イメージ(2016年完成予定)

授業に備える。ベルリッツは世界有数のグローバル人材育成企業として、ビジネス英語教育の分野で定評がある。ELSはベルリッツのグループ企業で、英語圏の大学への進学志望者を対象とする語学学校だ。アメリカを中心に、国外に60以上(大学内に50)の語学学習センター(以下、センター)を持ち、留学生に語学教育を行っている。

ベルリッツ、ELS、どちらとの連携も、塩崎均学長ら執行部のトップダウンにより決定したという。学内外から発せられた「英語教育の丸投げでは」「語学学校のような」という意見に対して、増田副学長は答える。「英語力の育成に最適なのは英語教育の専門

図表 国際学部のカリキュラム(抜粋)

	1年次		2年次		3年次		4年次	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
グローバル専攻(450人)	英語力養成 [ELS] 文法とスピーキング ポキャブラリー など	海外留学(アメリカ) — ELS+正規留学 — ELS+学部講義 — ELS	集中講義	専門教育の導入	専門教育 — グローバル・スタディーズ — コミュニケーション・スタディーズ — アジアン・スタディーズ			
	初年次教育・留学準備 基礎ゼミ 留学セミナー 異文化理解 グローバル化入門			教養・キャリア教育	ビジネス英語習得プログラム [ベルリッツ] キャリア英語、ディスカッション、ディベートなど			
東アジア専攻(50人)	中国語力養成	海外留学(中国)			専門教育			
	初年次教育・留学準備				教養・キャリア教育			
					ビジネス英語習得プログラム [ベルリッツ]			
韓国語コース	韓国語力養成	海外留学(韓国)			専門教育			
	初年次教育・留学準備				教養・キャリア教育			
					ビジネス英語習得プログラム [ベルリッツ]			

家であり、言語学者や英文学者ではない。多くの大学が語学にそれなりの時間を割いているのに、実際に身に付いていないという現実を見なければならぬ。合理性があれば、前例のあるなしにかかわらず、思い切ったことをするのが本学の校風だ。

アメリカで広く認められた質の高い授業を留学先で

新学部の大きな特徴は、1年次後期から約1年間にわたる必修留学。その目的の第一は語学の習得だ。グローバル人材になるには、まず道具としての言葉が不可欠であるとの観点から、1年次からの留学を設定した。早期に海外の文化、歴史、価値観に触れ、刺激を受けることによって、その後の学

習のモチベーションを高める狙いもある。帰国後すぐに就職活動や卒業研究の準備が始まることもなく、意欲があればもう一度、中・長期の留学をするという選択肢もある。

グローバル専攻450人一斉のアメリカ留学を可能にしたのが、ELSとの連携で、派遣先は同社のセンターがある大学だ。「大学だけの力でこの規模の留学先を新規に確保し、教育の質まで一定にすることは非常に難しい」と国際学部開設準備委員会の副委員長である藤田直也法学部教授は言う。

留学先では全員が、まずはELSのセンターに入校する。2015年12月現在、26センターを留学先としている。全てアメリカ国内としたのは、多様な国籍の人が集まるからだ。多くの文化に触れられるというメリットが、他国より授

業料が高いというデメリットを上回ると判断した。

ELSのセンターで1 Semester(近畿大学の1年次後期に相当)を過ごした後は、英語力に応じて「ELSの授業の受講のみを続ける」「ELSの授業の受講を続けながら現地の大学の授業を1科目履修する」「現地の大学に正規留学し、一般教養の授業を受ける」という3つの選択肢がある。

「正規留学」という選択ができるのは、ELSの質保証体制がアメリカの多くの大学に認められているからだ。ELSの授業は初級からマスターまでの4段階12レベルに分かれていて、1セッション(4週間)の授業を終えた時点で要件を満たしていれば、次のレベルに進む。授業内容やレベル進級要件が厳密に管理されているため、同じレ

ベルを修了した学生であれば、どのセンターで学んでも、同程度の英語力が保証される。アメリカの多くの大学では、入学条件の一つとしてTOEFLなどの語学検定で一定以上のスコアを求められるが、ELSの最高レベルを修了するとこれが免除されるため、近畿大学の学生にも正規留学の道が開かれるというわけだ。

質保証の信頼度が高い分、教育面のルールも厳しい。出席率が90%を切ると勧告があり、改善しないとビザが取り消しになる。3セッション続けて同じレベルにとどまった場合は、強制帰国を命じられる。

留学準備から始まる 独自性の高いカリキュラム

グローバル専攻を例に、カリキュラムの全体像を見てみよう(図表)。

1年次前期は、留学の質を高めるための準備に充てられる。近畿大学においてELSの講師18人が海外のセンター同様の授業を実施。留学後のセンターの授業に接続する。入学時のプレースメントテストによる能力別クラス編成で開講。1クラス15人以内で、週9コマ。留学前に必要な到達レベルなどは設けていない。

「基礎ゼミ」「留学セミナー」「異文化理解」では、大学における勉強の仕方、留学先での学習や生活のノウハウ、近畿大学の歴史(留学先で自学を紹介するため)などを学ぶ。

「グローバル化入門」は、複数の教員がリレー形式で講義。興味がある分野を見つけ、3年次に専門領域を選ぶ

時の参考にする。

2年次5月に帰国後、夏休みまでの2か月間は集中講義を開講する。「帰国後セミナー」は1年次前期の「留学セミナー」と同じクラス分けで、学んだことを報告し合う。学部開設3年目以降は「留学セミナー」に先輩の3年生も参加させ、留学体験が帰国後の学習にどう生かされているかを話してもらう予定だ。

2年次後期は専門領域を選択するために、各領域の導入科目のほか教養科目やキャリアに関する科目を主に英語で集中的に学ぶ。1年間の留学経験を基に自分が何に向いているかを考え、この段階で、社会に出て何をしたいのか、ある程度の将来像が定まっている状態をめざす。

並行して2年次後期から受講できるのが、ベルリッツの講師が担当する科目だ。スピーチ、ディスカッション、交渉など、ビジネスシーンで使う英語を学ぶ。授業はロールプレイが中心で、学生は常に英語で考え、話すことになる。学生のうちにビジネスの現場を疑似体験させ、不足している力を補うために、基本的には社会人向けに行っている授業に大きなアレンジは加えずに行う考えだ。

3年次前期からは、3つの領域に分かれて専門教育が行われる。夏休みには、海外インターンシップの斡旋も検討されている。4年次の卒業論文は、プロジェクトの実践に代えることも可能にする予定だ。

こうしたカリキュラムを支えるため、先述の学部棟を活用する。ELSをはじめ少人数制の授業が効率的に行えるよ

うに、セル(細胞)をイメージした小さな教室を多数設置する。

学部の教員は、英語で授業ができる人材、海外での教育経験が豊富な人材、アクティブラーニングに精通した人材を学内外から集めたという。

全学で施設・環境面の グローバル化が進展中

近畿大学は国際学部を構想した2013年にグローバル推進検討委員会を発足。「近畿大学の国際化ビジョン」を掲げ、全学のグローバル化を新学部の準備と並行して推進している。

2017年には、ラーニングコモンズ、図書館、語学センター、国際交流室などの機能を併せ持つ総合学習施設「アカデミックミーツ」が完成予定だ。

2018年には、全学部の語学の授業を行う語学棟を建設。同じフロアに教室と教員室を混在させ、学生と外国人講師との交流を促進する。

海外協定校の数も、2013年の約40校から約150校に増え、具体的な交流の中身を模索しているところだ。

文系学部は今後、英語で教えられる教員を多数採用し、英語による授業を増やす。国際学部では将来的に海外からの留学生を100人受け入れ、他学部の英語による授業科目も受講できるよう、検討を進めている。2015年のTHEランクインが、留学生確保におけるアドバンテージになりそうだ。

企業との全面的な連携による留学の必修化をはじめ、独自性のある取り組みが多く、今後もその動向が注目される。